

Contents Vol.212

2017.2.15

02 NEWS

DASH 好ダッシュ

1 Daitaidai Athlete Support & High Performance (DASH) プロジェクト特別セミナー

2 DASHに関心 JISSスポーツ科学会議

3 栄養セミナー、意外と悪くないアスリートの食事

04 特集1

多彩な賞 多彩な受賞者

06 特集2

本学OB、リオ五輪・パラリンピック特集

09 トピックス

1 キャリアフェスタ

2 野球部創部50周年記念式典

3 野球教室に小中学生120人

4 野球クリニックに他大学、クラブ指導者ら

5 雨創祭伝(うそうさいてん)

6 ダンス部単独公演好評

7 ダンス合同発表会

8 キャンプ実習

9 海洋実習

10 平成29年度 AO入試・推薦入試結果

14 コラム 窓

15 我が青春の記 曾根純也 安田友紀



DASH 好ダッシュ

ダッシュ、好ダッシュー。

大体大の教職員、経営資源を結集し、大体大ビジョン2024で唱える「世界で活躍するアスリートと指導者を育成・サポートする拠点づくり」の実現に向けて設置された大体大DASH (Daitaidai Athlete Support & High Performance) は始動してから、ほぼ1年を迎える。

この間多方面で活動を繰り広げている。最近の活躍ぶりをまとめてみた。

Daitaidai Athlete Support & High Performance (DASH) プロジェクト特別セミナー

～エンターテイメントにおけるタレントマネジメント及び活動拠点づくり～



講演するクロードディレクター

世界中から才能溢れるアーティストやパフォーマー、スタッフを数多く集め、世界を代表するエンターテイメント集団である「シルク・ドゥ・ソレイユ」のクロード・ブルポニエールデレクターを招き、10月15日、本学同窓会館アネックス研修室で大体大DASHプロジェクト特別セミナーを開催した。

シルク・ドゥ・ソレイユには、オリンピック選手をはじめとするトップアスリートが、パフォーマーとして入団して活躍するなど、セカンドキャリアの場としても有名だ。

今回は、クロード氏を招き、本学が大体大DASHプロジェクトを通じて実現を目指す「世界で活躍するアスリートと指導者を育成・サポートする拠点づくり」に必要なタレントマネジメントやその環境づくりについて学んだ。

クロード氏は、シルク・ドゥ・ソレイユのマネジメントの重要なポイントとして「多様性あるマネジメント」を紹介、職種のみならず、さまざまな経歴や言語、文化的な背景を持つ多国籍のアーティストや、スタッフの個性を生かしながら、ひとつの高度な専門的な舞台芸術として仕上げ

にも通ずる組織体制にかかわる情報についても、本学における「拠点づくり」の参考になった。と同時に、アスレチックリハビリテーションや、トレーニングなどについて学ぶ、多くの学生の活躍の場として、舞台芸術の世界があることが明らかになったことも、今回のセミナーでの大きな発見だった。

当日は、本学学生や教職員のみならず、浪商学園関係者、学園外からも20人余が参加、質疑応答も盛んに交わされ、盛況のうちに2時間の講演を終えた。

大体大DASHプロジェクト特別セミナーでは、本学が有する教育力、研究力を結集し、次代を担うアスリートやコーチ、競技力向上を担うスタッフや、サポート人材の育成などその環境整備を目指し、ハイパフォーマンスや、人財育成に関する知見の収集と、研鑽を目的にこれからさまざまな企画の開催を予定している。

【学長室DASHプロジェクト担当ディレクター

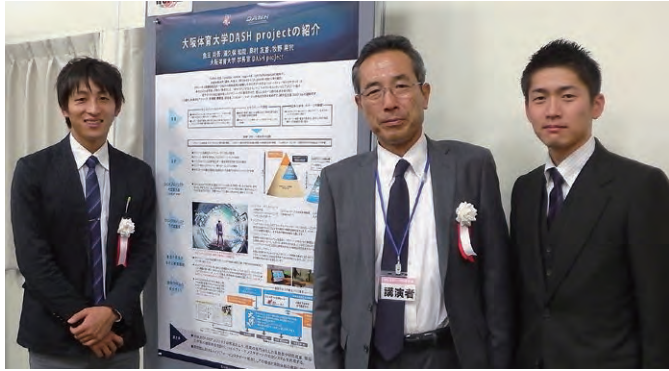
浦久保和哉】

る人的資源管理を挙げた。シルクの本部で各公演のコンセプト内容を練り上げながら、それらに見合うタレントや、スタッフを各地で採用するなど、中央と現場（開催地）の役割分担やその体制などについて示唆した。

また身体的なパフォーマンスでショーを売りにする、シルク・ドゥ・ソレイユには「パフォーマー・メデイシン」という部署に配置されたトレーナーにより、パフォーマーのトレーニングやコンディショニング管理が行われるなど、トップアスリートのサポート環境

DASHに関心 JISSスポーツ科学会議

第13回JISS（国立スポーツ科学センター）スポーツ科学会議は、11月29日、同センターで行われ、本学から岩上安孝学長、体育学部の梅林薫、土屋裕陸両教授、石川昌紀准教授、DASHプロジェクトの浦久保和哉ディレクター、魚田尚吾、牧野晃宗両スタッフが参加した。



DASHのプレゼンをした梅林教授（中央）、魚田尚吾さん（左）、牧野晃宗さん



にぎわうDASHのポスターコーナー

の内容が報告され、本学の梅林教授が座長を務め、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた活発な議論が交わされた。

午後のポスターセッションは本学から、梅林教授が「大阪体育大学におけるスポーツ医・科学体制について」、魚田が「大阪体育大学DASH Projectの紹介」、そして牧野が「統一的パフォーマンス研究・サポーター拠点センターの取り組み」の題目でポスター発表を行った。

会場は盛況で、スポーツ指導者、研究者、雑誌編集者、行政関係者などさまざまなバックグラウンドを持つ参加者から本学の取り組みについての関心と質問が寄せられた。

その後、最終シンポジウムとして「パラリンピックにおける医・科学サポーターリオまでのサポーターから学ぶこと」が行われ、近年、特にオリンピック同様の充実したサポーターが、パラリンピックでも支援されていることが大きな話題となった。

本学は、一昨年3月にJISSの母体機関である独立行政法人JISC（日本スポーツ振興センター）と包括連携協定を結び、今後も本学の研究実績と教育力を活用したスポーツ科学と、そのサポーターの拠点づくりを具現化するため、JISSとの緊密な連携体制を構築し、事業の連携を進めていく予定である。

【学長室DASHプロジェクト担当ディレクター 浦久保和哉、スタッフ 魚田尚吾】

栄養セミナー、 意外と悪くないアスリートの食事

大学図書館主催による、アスリートの食事に関するセミナーを、9月30日、昼



大体大アスリート食のバックナンバー

休みを利用して本学中会議室で行った。IOC（国際オリンピック委員会）の合意声明2010では、アスリートの食事について「多くの種類の普通の食品から必要なエネルギーを取れば、練習や試合に必要な栄養素が取れる」と示されている。

今回のセミナーではこれに基づき「アスリートの食事」に関心を持つ参加学生44人を対象に、アスリートの食事の基本である5つのグループ（主食、主菜、副菜、果物、乳製品）について、栄養素や食事の役割を絡めてお話しした。しかし「5つのグループを揃えようと頑張っているけれど難しい」という学生や「部活や学業で大変なのに毎日面倒」という学生は比較的多いと思う。

そこで、本学運動栄養学研究室が、まずはここから始めよう、というコンセプトで提唱している「意外に悪くない朝食」及び「意外に悪くない昼食、夕食」を簡単なものに栄養が取れる方法として紹介した。



アスリートの食について熱心に聴く学生たち

また、スポーツ栄養に関して誤解しやすい箇所をクイズ形式で考えてもらった。セミナーの内容や、アスリートの食事については、図書館や食堂、トレーニング科学センター、ATルーム、診療所に配置している「大体大アスリート食」Vol.117にも掲載してあるので、よかったら手にとって見てください。

【DASH栄養 奥村友香】

大学図書館では、2年ほど前から、奥村さんが作成している「アスリート食」のリーフレットを設置。それに伴い、栄養、食事に関する書籍を紹介するスペースを増やしたところ、貸し出しも増え、学生の関心が高いことが分かり、今回のセミナーとなった。

多彩な受賞者

文部科学大臣表彰 「生涯スポーツ功労賞」を受賞して

副学長 福田芳則

学校体育や社会体育、生産体育の振興を開学の理念の柱として、大阪体育大学は昭和40年に設立され、当初から「レクリエーション実技」が開設されてきました。学校体育、競技スポーツのみならず、スポーツを楽しむながら人生を豊かにするためのレクリエーションの理念、方法論の重要性を認識されていた加藤橋夫先生、大島鎌吉先生ら先人たちの先見の明は、瞠目に値します。



栄えある賞を受けた福田副学長

また、日本レクリエーション協会から、カリキュラムや教員について認定を受けた大学が、指導者養成を行う制度（課程認定校制度）が昭和58年に開始されました。本学も昭和62年度から認定を受け、レクリエーション指導者養成を始めました。

指導者養成校の全国や大阪の組織の運営や、改革に携わる中で、日本レクリエーション協会の理事や大阪府レクリエーション協会の役員を歴任し、30年以上にわたって貢献してきたことが認められての受賞となり、10月7日、文部科

学省で松野博一大臣から賞状と副賞をいただきました。

大学にレクリエーションの授業があったから、課程認定校制度があったから、本学での仕事の一端として長年携わったレクリエーション教育、指導者養成が評価されたの受賞であると、感慨深い思いと感謝の思いでいっぱいです。

生涯スポーツへの貢献が評価されたことは、大阪体育大学にとっても大切なことであり、喜ばしい成果と受け止めています。今後ともこれまで以上に精進努力する所存です。

ヤマハ最優秀論文発表賞を受賞して

体育学部准教授 尾関一将

2016年日本水泳・水中運動学会年次大会で、ヤマハ最優秀論文発表賞を受賞することができました。発表内容は「競泳選手における実力発揮度と心理的競技能力の関係」という内容で、指導現場における疑問を形にしようと、ゼミ生たちと取り組んで行った研究成果です。

本学水上競技部の学生をコーチングする中で「練習タイムが早い選手なのになぜ競技会では成果を出すことができないのだろうか」と考えたことがきっかけで、この研究を行いました。研究

とは、何よりの励みになりました。大学院生時代の指導教員である桜井伸二先生に「尾関は水泳指導と研究活動が両立できてやっとな人前だ」と指導を受けました。その初心を忘れることなく、今後とも教育、研究活動を行っていきたいと思います。最後に研究指導をして下さいました共同研究者である菅生貴之先生、文献検索やデータ収集を手伝ってくださいました学部生の皆さんに深く感謝いたします。

究成果として、選手の目標タイムに対して行う、レースペーストレーニングの重要性や、競技会におけるゲームプランの重要性を示すことができました。自分の専門分野であるバイオメカニクス研究では、このような賞を受賞したことがないのは残念ではありますが、毎日プールサイドに立ち、コーチングをする中で生じた疑問をこのような形で明らかにすることができ、さらに水泳研究の関係者の皆様に評価していただけたこ



受賞した尾関准教授（右は菅生准教授）

多彩な賞

文科大臣賞、ヤマハ最優秀論文賞、身体運動
本学ならではの多彩な分野で、日頃の活動、研究、
喜びと、これからの抱負など

身体運動文化研究優秀論文賞を受賞して

体育学部助教 村上雷多

この度、平成28年度身体運動文化研究優秀論文賞という、大変名誉な賞をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。このような賞をいただけたのも、多くの先生方のご指導のおかげであり、私1人では決して論文を書き上げることはできませんでした。ご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

身体運動文化学会は、スポーツや武道、舞踊、芸能、祭りといったあらゆる身体運動を別々のものとしてではなく、ひとつの文化として捉えることで価値を見出していくことを目的としており、さまざまな分野の先生方と知識を共有することができる大変貴重な学会です。私が専門としている剣道は、独自の文化性や、伝統性を兼ね備えた身体運動文化として、今日、幅広い年代の方々が、日々けいこに励んでいます。

今回出させていただいた論文は、剣道の文化性の中で、特に重要とされる「精神性」について、近世期（江戸時代）のあらゆる史料に基づいて研究を行ったものです。近世期の精神性を見ることで、現代剣道において、精神性が重要視されるに至るまでに背景を明らか



表彰状を手にする村上助教（右）

にすることができただけでなく、私自身の今後の剣道実践及び、学生指導にも生かしていくことができると考えています。まだまだ多くの課題が残されておりますが、今後さらに研究を進めていくことで、より成果のあるものになってきたらと思います。

最後になりますが、今後この賞の名に恥じないように、学生教育、研究活動に精進し、少しでも大学に貢献できるように努めていきたいと思っております。ご指導のほどよろしくお願致します。ありがとうございました。

富山ゼミ生、 笹川スポーツ財団

スポーツ政策コンテスト特別賞

体育学部教授 富山浩三

この度、笹川スポーツ財団が実施しているスポーツ政策コンテスト「スポーツポリシーフォーゼミパン」において、富山ゼミの学生が特別賞を受賞しました。この大会は全国の21大学54チーム、総勢283人の大学3年生が参加して、スポーツ政策提言の内容を競う大会で、第6回を迎えました。今回は、明治大学駿河台キャンパスで10月29、30両日に開催されました。受賞した富山ゼミの提案内容は、日本の「オタク」の人たちにスポーツ参加を促すことで、スポーツ参加率65%を達成しようというものです。

ある調査によると、現在日本では約40%が自分のことをオタクと答えるのだとか。これだけの人がスポーツに参加することにすれば、確実にスポーツ実施率の向上を測る事が可能となり、おたくのイメージも変わり、健康的になるのではないかとこのように思います。種目は、アイドルの振り付けをマスターしてのダンス活動で、これはかなりの運動量があ

り、アイドルオタクは実はかなりの運動をこなしているといえます。大会に参加したゼミの学生は、政策提言をまとめるプロセスが勉強になるのはもちろんですが、会場で他大学の人たちの発表を聞き、質問をしたり交流会に参加したりすることで、全国の大学生とのつながりが深められることに意義を感じていました。富山ゼミは昨年も優秀賞を受賞しており、2度目の受賞を喜んでいます。



受賞を喜ぶ富山ゼミの学生たち

本学OB

リオ五輪・パラリンピック特集

日本選手団が、過去最多のメダル41個を獲得して沸きに沸いたリオデジャネイロ五輪、そして金メダルこそ逸したが、メダル24個を得て感動を与えてくれたパラリンピック。

本学からは、五輪に学部、大学院のOBが、監督やコーチとしてチームを引っ張り、現役の藤春廣輝選手（ガンバ大阪、体育学部43期生）がサッカーに出場した。さらにパラリンピックでは山本篤選手（スズキ浜松AC、大体大DASH認定アスリート、大学院博士後期課程12期生）が、走り幅跳び（切断など）で銀、アンカーを務めた男子400メートルリレーで銅メダルを獲得、指導者や山本選手らは野田賢治理事長、岩上安孝学長を表敬訪問したり、特別講演をして後輩たちに熱いメッセージを送った。

選手支援で 文科大臣賞 受賞

リオ五輪・パラリンピックでのスポーツ功労団体として本学が文部科学大臣賞を受賞した。1月17日、東京八芳園「白鳳館」で授賞式があり、本学を代表して岩上安孝学長が出席、文科大臣賞を授与された。

パラリンピック陸上の山本篤選手に、「競技力向上のための研究とトレーニング活動のための施設を提供していること」が受賞理由。

特別講演

大健闘の7人制ラグビー、瀬川HC

7人制ラグビー男子日本代表の瀬川智広ヘッドコーチ（平成4年度卒）の特別講演会が9月26日、本学であり、2000人を超える学生、教職員の前で、瀬川HCは、4位と大健闘したチームの舞台裏を語った。

初の五輪で強豪・ニュージーランドを倒すなどの快進撃を見せ、15人制ワールドカップ（W杯）での南アフリカ戦勝利に続き、大きな成果を日本ラグビー史に残した男子セブンズ。ニュージーランド戦での大金星は、入念な準備があつてのものだった。瀬川HCは「ニュージーランドは、しっかり準備すれば勝てると思っていた。過去の試合をさかのぼって、ボールの動かし方を研究し、それまで使っていたサインをすべて新しくした。（さらに）週に1回、ニュージーランド戦を想定し、ホテルから、テーピングを巻くことなど、すべてをシミュレーションした」と明かす。そしてチームは「ニュージーランドさえ倒したらあとは勢いで」と英国には惜敗したものの、思惑通りにケニアには大勝、フランスには逆転勝ち、メダル一歩手前の4位に食い込んだ。

ただリオに入る直前まで、チームの状態は決して良くなく「厳しいコンタクトをしたら『ちょっと肉離れしそうなので抜けていいですか』という選手がいたり、いまいち（気持ち）上がってこなかった」という。そんな中でメンバーから漏れた山田章仁（バナソニック）、藤田應和（同）両選

手が最終合宿で「一番」と言えるほど練習に打ち込んでいた。そして桑水流裕策主将（コココーラ）もこのままではいけないと「メンバーから落選したあいつらのためにも頑張ろう」と話し合い団結し、チームは「変わった」と瀬川HCは話した。

最後に瀬川HCは「3年後には東京でオリンピックが開催される。選手としてももちろんだが、スタッフ、トレーナーなど、さまざまな形でかかわることができると思う。それぞれ自分の目標に向かって、頑張ってください」と激励の言葉で講演を締めくくった。



瀬川HC（右端）の講演を熱心に聴く学生たち

特別講演

水泳・竹村HC熱弁

五輪水泳競技日本代表の竹村吉昭ヘッドコーチ（体育学部10期生）が10月28日、岩上安孝学長を表敬訪問、福田芳則副学長も同席した。竹村HCは大学時代は基礎スキー同好会に所属、授業では「運動生理学が今も役立っている。もう一度勉強したい」と振り返っていた。卒業後、スイミングスクールに勤めてから指導者として頭角を現し、五輪はリオで3回目

のコーチ。2015年の世界選手権からHCとして活躍、メダリストを送り出している。

この後、開学50周年記念館で「リオデジャネイロオリンピックを振り返って」をテーマに講演、日本チームの現状と世界から見たポジション▽リオ五輪の反省▽私の指導法を柱に話した。トップアスリートを指導するコーチとしての立場からの目線で分析、解説を交えて分かりやすくスピーチ。

熱く語る竹村HC

自身の指導方法は「相手を育てる」「相手を支援する」「相手を前向きにする」をメーンにしていると言う。また選手個人と向き合うことで、その選手には何が必要なのかを見極めることが指導者としては大切なことだと言い、「100%の力のうち、80%を出し切れるかどうかがメダルの分岐点」とした。

また日本の水泳界は選手層が厚く、底辺からどんどん上がってくる構図は他の競技に比べて際立っており、「スイミングスクールと大学スポーツがうまくかみ合っているのは日本だけ」と言い切った。水上競技の部員ばかりでなく、将来指導者を目指す学生たち、教職員たちで大教室はほぼ満杯で、熱心に聴き入っていた。

特別講演

山本さん、凱旋講演

リオパラリンピックで2つのメダルを獲得した陸上男子の山本篤さんが、10月17日、本学で「凱旋講演」を行った。

男子走り幅跳びで世界選手権2連覇中の山本さんは、日本人第1号の金メダルも期待されたが惜しくも銀メダルとなった。山本さんは「あと8センチ及ばず悔しい。体は動いていたけど、『日本に金メダルを』と心はやりすぎたかもしれない」と競技を終えた時の心境を振り返った。

順位は劣るが、この銀メダルよりうれしさを感じたのが400メートルでの銅メダルだったそうだ。日本チームは日本記録を出して4位でゴールしたが、米國がバトンタッチでミスをしたため、繰り上げて3位となった。アンカーを務めた山本さんは「ベストメンバーではなかったが、日本記録を出せたし、自分たちの力をしっかりと出した」と納得の行く走りが出てきたと話した。

がいてスポーツを盛り上げるためにも大きなメダルだったようだ。

またこの日は聴講する学生へ「メダルは振ると音が鳴ります。銅メダルと銀メダルでは音が違います。ぜひ振ってみてください」と2つのメダルを順に回すという粋な計らいを見せ、熱心に聴いていた学生たちは感動した様子だった。

3年後の東京大会では38歳になる山本さんだが「3年後まだ現役で活躍できるかわからないけれど、自分たちは体と『道具』（義足）を使いこなして戦っている。うまくコントロールしながら、東京を目指していきたい」と抱負を話し、講演会を締めくくった。

「メダルがあるのとないのでは、帰国したあとで違う。メダリストのワールドがあったり、メディアへの露出も全然違う」とパラリンピック、ひいては障



いつものスタイルで講演する山本さん

第60回 関西スポーツ賞表彰式
関西運動記者クラブ



記念撮影の山本さん（前列右から2人目）

山本選手関西スポーツ賞受賞
リオパラリンピックメダリスト

関西運動記者クラブが選ぶ第60回関西スポーツ賞の授賞式が1月16日、大阪市内のホテルで開かれ、リオデジャネイロ・パラリンピック陸上男子幅跳びで銀メダル、アンカーを務めた男子400メートルリレーで、銅メダルを獲得した山本篤選手（スズキ浜松AC、大体大DASH認定アスリート、大学院博士後期課程12期生）が個人賞を受賞した。

山本選手は「リオでは金（メダル）を目指していたので、8センチ差で金に届かなかったのが悔しかった。2020年には金メダルを目指します」と受賞のあいさつ、さらに来年の韓国・平昌（ピョンチャン）冬季パラリンピックから正式競技になったスノーボードにも挑戦、冬夏のパラリンピックでメダルを目指すことを明らかにした。スノーボードは中学1年生からやっていて、近々練習に取り組むという。

山本選手は、シנקロナイズドスイミングで3大会ぶりにメダルを取り戻した井村雅代ヘッドコーチ、ロンドン、リオと2大会連続で女子卓球をメダルに導いた村上恭和監督ら団体で受賞した指導者たちと懇談、「冬も頑張ってる」と激励されていた。

このほか、柔道男子73キロ級の金メダリスト、大野将平選手▽空手世界選手権、荒賀龍太郎選手▽フィギュアスケート世界ジュニア選手権優勝の本田真凜選手（関大中等部3年）▽阪神タイガースで新人王に輝いた高山俊選手ら、そうそうたる受賞者たちと記念写真に納まっていた。



シנקロ井村HC（右）と

眞鍋前監督
タブレットの裏話



笑顔で話す眞鍋前監督

リオでこそメダルを逸したが、ロンドン五輪（2012年）で、バレーボール女子を28年ぶりのメダル（銅）に導いた眞鍋政義前全日本女子バレーボール監督（平成17年度大学院修士課程修了）が11月14日來学、野田賢治理事長に帰国報告、和やかに懇談した。

野田理事長から「8年間、お疲れ様でした」と労いの言葉をもらうと、眞鍋前監督は「ご期待に添えずすみませんでしたが」と、ちよつぷり無念の色をにじませた。日本バレーボール協会からは「東京五輪まで」と統投を要請されたそうだが「あと4年は（心身とも）もたない」と、固辞したという。

2010年の世界選手権からタブレットを駆使して目立つようになったが、相手チームを分析するのにもさることながら、選手起用の際、各選手のデータを示して、選手たちを納得させるためのツールだったことを明かし、2008年に監督になり「初めて女子を指導したが難しかった」と振り返った。

波が速いスピードでできている」と、世界との差を実感させられたようだ。

本学女子バレーボール部監督の長江晃生助教はロンドン五輪にコーチングスタッフとして帯同している。

自身のセッターとしての経験から「バレーボールのセッターのトス回しについてのゲーム分析的研究」の論文で修士号を獲得した修士監督は、「世界で男子化の



野田理事長（前列左）と岩上学長（右）
後列左から浅井、梅林、藤本各教授

キャリアアフェスタ

生の声に関心

「知らない世界を知ろう」生の声を聞いて実際の社会を感じよう」をテーマに、3年生を対象にしたキャリアアフェスタが9月15、16両日行われた。26の企業、団体、進学等のブースが設けられ、学生は1日4ブース、2日間で8ブースを回って、8つの話を熱心に聴いていた。

学部学科別の全体会から始まり、体育学部スポーツ教育学科の全体会では淵本隆文体育学部長が「授業ではなかなか聞けないさまざまな会社、社会の勉強、世界観を知るといふことです。多くの企業の方が話をしてくださいます。緊張感を持って臨んでください」と心構えを話した。



一線で活躍する講師の話熱心に聴く3年生たち

野村證券に入社が決まっている田口富友さん(体育学部)は「教師を目指して大体大に入学したが、勉強を始めていくうちに何かが違うと感じるようになり、消防士や他の公務員を考えるようになった。それでもモヤモヤ感がぬぐえず、1年前にキャリアアフェスタで企業の話聞き、生き生きと働いているようで面白いと思った。キャリアアフェスタをきっかけに視野を広げてくださ」と後輩を激励した。

全体会の後、それぞれのブースで説明会があり、企業によっては本学卒業生が担当するブースもあり、3年生たちはより身近に感じて話を聞いていた。キャリアアフェスタで初めて企業に触れる学生も多く、「生の声を聞く」というテーマをしっかり体験していた。2人の学生に体験記を寄稿してもらった。



健康福祉学部3年
松岡 友梨

目標の教師像鮮明に

キャリアアフェスタを受けて印象に残ったのは、自分が目指している教師についてのブースでした。実際に大体大の卒業生で、教師になられた方が来てくれて、どうやって勉強したのか、試験のことなどを詳しく聞くことができ、勉強中の気分の入れ替え方など、具体的に聞けたので、とても身近に感じることができました。

また、今、働いていらっしゃる学校の様子

や、授業の感じなども話され、「現場でどういうことをしているのか」など普段なかなか聞くことができない話を聞いていただき、とても実感が湧き、これからの勉強をもっと頑張って、私も同じところに立ちたいと強く思いました。

もうひとつ印象に残っているところはリゾートトラストで、これも大体大の卒業生が話しかてくれていて、上手で聞き入ってしまいましたが、社内での雰囲気なども話してくれ、その場に来てくれている人たちだけでもとても仲良やさそうで、楽しそうな感じが伝わってきました。月収の話も具体的だったので驚きました。お客さんとお話して契約をとる仕事なので大変そうだけど、契約をとれた時のうれしさや、やりがいがある仕事だと感じました。

全体を通して、将来についての仕事がいかに具体的に知ることができたのは初めてで、仕事に対する実感も湧き、将来についての楽しみも感じることができました。キャリアアフェスタはとても自分のためになったと思います。



体育学部3年
坂下 貴彦

進路を変えるきっかけに

私は現在OUHSジャーナルに所属し、学生記者として活動をしています。きっかけはキャリアアフェスタでした。元々教員志望で、企業に就職という道は考えていませんでした。しかし、前回のキャリアアフェスタで教員のブースを回った後に面白い話が聞けるのではないかと、日刊スポーツ新聞社のブースに行きました。演者が大体大卒のうえ、話の内容もスポーツにかかわることだったので、話ののめりこんでいました。

特に好きなスポーツという世界、トップアスリートにしかかかわれることに魅力を感じ、スポーツメディア関係の業界に興味を持ち、教員ではなく、この仕事をしたと気持ちが変わりました。学生のうちからそれに似た活動をしたとしたい、OUHSジャーナル編集室で今に至ります。

初日は大和ハウス工業、三井住友銀行、皇宮警察、大学院のブース、2日目は象印マホービン、大阪拘置所、吉本興業、三菱商事のブースに行き、住宅、金融、警察、進学、製造、刑務官、サービス、総合商社とさまざまな業界、業種の話聞くことができました。

普段よく名前を聞いたり、利用している企業も多かったのですが、業務内容はほとんど知らないものばかりで、話を聞き、業界に対して勝手に抱いていたイメージが変わりました。特に今まで考えたこともなかった大学院進学や、刑務官、皇宮警察の業務内容や待遇等、新しい事を知れてとても視野が広がったと思います。就職活動に生かしたいと考えています。

野球部創部50周年記念式典

創部50周年を迎えた男子硬式野球部の記念式典が1月15日、大阪市内のホテルに、硬式野球部OB、大学・学園関係者、各大学野球連盟、プロ野球関係者ら約400人が出席して盛大に行われた。

硬式野球部OB、藤瀬史朗会長（浪商学園運動部強化センター部長、元近鉄）が開会のあいさつ、野田賢治理事長が「平成18年春、全日本大学選手権で優勝して全国に名を轟かせ、昨秋は4年ぶり5度目の神宮大会出場で50周年に花を添えた。これからも大学の名を高めていただけるよう、活躍



ズラリと勢揃いした本学OB現、元プロ野球選手

を期待している」岩上安孝学長は「50周年を迎えた野球部が、藤瀬OB会長、阪本野球部長、中野監督のもとに、全国のOBの皆様との好循環を一層深め、さらなる飛躍、発展を」と祝辞を述べ、阪神大学野球連盟・井本康則理事長が、来賓を代表してお祝いのメッセージを送った。

藤原敏司熊取町長、八島弘之泉佐野市副市長、西岡宏堂日本高野連副会長ら来賓紹介の後、長家秀博大体大同窓会会長（大阪歯科大准教授）の乾杯の発声で宴が始まった。創設者、黎明期のOBたちに藤瀬会長から感謝状が贈られ、全日本大学野球選手権大会優勝時のメンバーが壇上にあがり、それぞれが紹介され、大学日本一を勝ち取るまでを編集した「大体大魂」の映像が流れると、大きな感動の拍手が起こり、あちこちで自分たちの時代を懐かしむ姿が見られた。



プレートを手にする上原選手（左）と吉田前部長

次いでOBプロ野球選手の上原浩治（米大リーグ、シカゴカブス）、米大リーグから移籍した村田透（日本ハム）、ローテーションの一角を担う、松葉貴大（オリックス）ら9選手が紹介され、平成28年度ドラフト指名の酒居知史（千葉ロッテ）、菅原秀（東北楽天）、両選手も壇上に上がった。村田選手が代表してあいさつ、上原選手は酒居、菅原両選手に「プロは成果を出してからこそ認められる」と激励した。

中野和彦監督、吉田精二前部長らが感謝状、功労賞、記念品などを受け、中野監督は「監督として22年携わってきた。リーグ優勝25回、大学選手権優勝は皆様のご支援の賜物。これからも全国で好成績を残せるように努める」と謝辞を述べた。大いに盛り上がった記念式典は、寺尾博和・OB会副会長（日刊スポーツ編集委員）の威勢の良い一本締めで閉会した。

野球教室に 小中学生120人



子供たちから質問攻めにあう松葉（右）、酒居両選手

子供たちへ最高のクリスマスプレゼント。大体大硬式野球部OB会主催の野球教室が12月25日開催され、熊取町、大阪市、和歌山県から小中学生の軟式野球9チーム、120人が参加した。

2回目となる野球教室は、開学50周年記念として開催した昨年と同様に野球部OBを招き、今回は松葉貴大（オリックス）、酒居知史（千葉ロッテ）、村田透（日本ハム）ら7選手が来学した。選手たちは、打撃・走塁・投球・守備の4グループに分かれて熱心に指導にあたった。

投球グループは松葉、酒居両投手が担当、松葉投手はコントロールを良くするにも、変化球を磨くにも「キャッチボール」は大切だと話し、「キャッチボールは野球の基本だけど、基本が一番大切。僕も基本を大切にしてきたからプロになった」と説得力のある指導に、野球少年たちは目を輝かせながら聞き入っていた。

またキャッチボールの後には質問タイムを設け、「オリックスの誰と仲がいいんですか？」という身近なものから、深い話へと発展し、「人付き合いで自分の人柄も変わる。悪い人をつるんではない、自分もそういう風になってしまおう」と野球というよりも、人生相談といった場面も見られた。参加した野球少年たちにとって有意義な時間となったのに違いない。

野球クリニックに他大学、クラブ指導者ら

日本球界で活躍中の本学卒業生、現役プロ野球トレーナーとストレングス&コンディショニングコーチ4人を招き、12月17日、本学1号館（開学50周年記念館）でクリニックを開いた。プロで培ったノウハウや経験を基に、スポーツ現場でのパフォーマンス向上や、けが防止などについて幅広い話、パネルディスカッションに、本学学生や教職員をはじめ、神戸大など他大学の野球部員、履正社高校や地域で活動するクラブの指導者など約90人が、メモや写真を撮るなど熱心に聴いていた。

本学学長補佐、梅林薫体育学部教授がいさつ、スポーツ科学センターの安田昌玄・S&Cディレクターが司会・進行、4つのプログラムで講演が行われた。少年期の障害防止について、杉本一弘・阪神チーフトレーナー（第20期生）▽米国でのトレーナーとしての経験「ここが日本と違う」北野一郎・中日コンデショニングコーチ（第32期生）▽プロ野球シーズン中に行われる補強トレーニング 宮前岳巳（第23期生）、塚本洋（第30期生）両中日コンデショニングコーチ。

野球のコンデショニング、障害予防の考え方、トレーニング法実技などについて、詳しいデータや映像を使った分かりやすい話しの後、一問一答形式だったので、参加者は「とても参考になった」「聴いたことをぜひ実行してみたい」「これからの指導に生かしたい」などと感想を述べていた。

パネルディスカッションは4氏に、安田ディレクターも加わり、コーディネーターの三島隆章体育学部准教授が、講演をした中のポイントを取り上げ、質問形式で進めた。パネラーは、大体大時代の思い出、トレーナーを目指すきっかけなどを話した後、プロの現場でのコンデショニングや、トレーニング法など活発に意見交換した。

「雨創祭伝（うそうさいてん）」 50周年へ向けた雨山祭の試み

第49回を迎えた雨山祭は、例年とは一味違った大学祭となった。今回は、「雨創祭伝（うそうさいてん）」をテーマに10月29、30両日に開催された。テーマの意味は、「今までにない雨山祭を創り上げ、雨山祭に携わっていただいたすべての人、来てくださった方々へ感謝の気持ち」を伝えたいという思いが込められている。

当日は天候にも恵まれ、大学内は多くの人場者の笑顔と活気に包まれたまま、大いに盛り上がり大成功で幕を閉じた。

開催するにあたりさまざまな形でご協力、ご協賛してくださった各関係者の皆様や毎年、私たち実行委員会をご指導ご鞭撻してください、サポートしていただいた教職員の皆様をはじめとする教職員の皆様に、雨山祭実行委員会を代表し厚く御礼申し上げます。皆様方のご協力があったからこそ雨山祭大成功だった。

今回は、今までで最も多くの実行委員29人を迎え入れた。部活に行きたいな、雨山祭の活動に5月から参加してくれている1年生をどうまとめようか、この活動の楽しさをどう伝えたいか、試行錯誤の日々が続いた。人数が多い分、個性豊かな学生が集まり、まとめるのも一苦労した。時には、厳しいことも言ったが、全員がそれを受け止め、当日が近づくと、見違える程に実行委員として人間として成長をしてくれた。

また、人数が多かったことで4年前に行われた「コミュニティ」という企画を復活

させることができた。新たな試み当初は、誰も展開が予想できず、苦言を呈する人が多かったが、実行委員の努力と、多くの方のサポートもあり、大方の予想を覆し盛会裏に終えることができた。

各企画が一つにまとまり、その企画全部が団結することで、今までにない雨山祭を創り上げられた。実行委員のみんなには感謝の一言に尽きる。

来年は節目の50周年を迎えるため、今年以上に期待が高まっているが、次の実行委員にはプレッシャーなど感じず、自分たちの雨山祭を築き上げてもらいたい。最後に、第49回雨山祭に実行委員長として携われたことを幸せに感じます。

【第49回雨山祭実行委員長、

教育学部2年 吉田純】



1年かけて雨山祭に取組んだスタッフ

大阪体育大学OB 日本プロ野球トレーナーと ストレングス&コンディショニングコーチによるクリニック 大阪体育大学 2016.12.17 Sat.



ディスカッションするパネラーたち

ダンス部の第41回単独公演「異空間」は、10月15日、高石市のアプラホールで大勢の観客に見守られるなか、盛会のうちに終了することが出来た。単独公演を開催するにあたり、ダンスの作品や技術力を高めるのはもちろんのこと、ポスター作り、衣装製作、運営資金集め、そして集客するための宣伝活動等が不可欠である。そのため、ダンス部に入ると、「何でもやる」必要があるが、自然と「何でも出来るようになる」部活かもしれない。

新境地の創作作品

ダンス部単独公演好評

単独公演

さて、本題のダンス作品について、紹介させていただく。本公演は、全11作品、約2時間の上演だった。その中で再演をした第29回全日本高校大学ダンスフェスティバル(神戸)で神戸市長賞受賞の「砂々乾ききった他者への関心」は、新境地を切り開く創作作品として高い評価を得た作品である。

本作品は今の学生自身が感じる人間関係の築き方をテーマとし、ダンサーたちは、砂の城のように何かの拍子で簡単に崩れてしまう他者とのかわりを、ユーモアのあるエネルギーッシュな動きで踊りきった。公演のテーマ作品「異空間」は、15分の大作となり、想定外の問題ばかり起こる現代社



人気を博した単独公演

会を彼らなりに見つめた作品となった。近年、うれしいことに学内外から大体大ダンス部の活動が認められて、パフォーマーダンスや、ボランティアでの指導依頼も多い。ダンスには、「自分」を知り、「他者」とかわりあることで、生まれる表現があり、部員たちは、ダンスを創造する行為やその過程の中で、コミュニケーションする身体を自在に使い、自然と人間力を高めあっているようだ。これからの成長に期待したい。

【ダンス部監督、体育学部准教授 白井麻子】

体育学部准教授 白井麻子

合同発表

熱気と静寂 ダンス合同発表会



日ごろの成果を披露する学生たち

第34回ダンス合同発表会が12月17日日本学ダンス室であり、9組の学生チームが参加し、会場は熱気であふれ、審査の結果5組が受賞した。

各組ともダンスカリキュラムで学んだことを十分に生かし、学習の成果を思う存分発揮、素晴らしいパフォーマンスを披露しており、将来指導者を目指す学生もいて、

一層熱がこもった発表会になった。独創的なものあり、前衛的なものあり、考えさせるものありと、10月からそれぞれグループレッスンを始めたとは思えないほどだった。

白井麻子ダンス部監督(体育学部准教授)ら4人の実行委員が審査、その結果を待つ間に特別プログラム、大体大浪商ダンス同好会の「STRAWBERRY サデイスティック&SHAKE THAT BRASS」、神戸市長杯などを受賞した創作ダンス部の「砂々乾ききった他者への関心」が披露されると会場はその瞬間、息が止まったかのような雰囲気になった。

最後に「素我蝶部(すからべ)」藤井泉、宮原由紀夫両氏が「白夜」を披露、会場はプロの演技に酔っていた。

受賞は次の通り。

▽最優秀賞 スポ教2年Gクラス「不滅の独裁者」▽グループダイナミック賞 スポ教2年Fクラス「タイムスリップ」平成っ子、昭和へ行く」▽ねらったで賞 健スポ2年LJKクラス「食物連鎖」狙っているけど狙われている」▽考えさせられたで賞 健スポ2年LMクラス「救えなかつた命」▽世の中お金で賞 4年選択クラス「貧富ぶぶ」本当の幸せとは何か」

大雨の中での登山

キャンプ実習

キャンプ実習は9月26日から30日まで、長野県・菅平高原で行われた。一昨年までの課題だった、10月1日の就職内定式を避けることができ、参加学生は一昨年より若干多い22人に留まった。準備をしていたスキーウェアを毎晩着込む必要がなくなり暖かかったことがうれしいことの一つだった。

今回は神崎浩先生、高本恵美先生、手塚洋介先生の3人の先生方にご協力いただいた。神崎先生からは「武道・気・自然について」のレクチャーを、高本先生からは「身体の動作の視点からキャンプ活動における動きについて」のレクチャーを、手塚先生からは「目標設定について」のレクチャーをしていただいた。教室とは違って、自然の中での先生方の話に学生たちは吸い込まれるように聞いてた。

1日目のアイスブレイキングやテント設営、2日目のASE（課題解決型プログラム）は、天候が大きく崩れることはなかったが、メインプログラムである3日目の登山は悪天候が予想され、予定していた黒姫山より少し距離が短い飯縄山（1、917m）に変更した。それでも、往復6時間の行程であるため、なかなかハードな登山だった。朝から天候が悪く、地図とコンパスで方向を定めながら各班で山頂を目指した。山頂に着く頃には大雨になり、視界は全くなく、ものの数分で下山することになり、まるで修行のような登山だった。山頂で雄大な景色が見られたときには達成感を味わ

い、つらくても登りがいを感じられたのだが、このような状況の中では黙々と歩きながら「なぜ私は山を歩いているんだろう」と考える自分と長い時間向き合うことになる。人がコントロールできない自然と己に対峙するこの長い時間は、現代社会では得難くなってしまう貴重な時間のようになんとなつては思う。学生たちはあの大雨の中、何を想い、山を歩いていただろう。

【キャンプ実習副主任、
体育学部准教授 伊原久美子】



飯縄山山頂で

さまざまな気づきを得た海洋実習

平成28年度の海洋スポーツキャンプ実習が9月5日から9日までの5日間、徳島県のYMCA阿南国際海洋センターに、学生115人が参加して本実習が行われた。

実習生は6班に分かれ、カヌー、カヤック、ボードセーリング、カッター、ウォークラリー、1人乗りヨット、2人乗りヨット、無人島での活動などのプログラムを体験した。実習期間中、台風の接近に伴う天候変化のため、実習で使用するヨットなど重たい機材を撤収しなければならぬ場面があったが、日ごろから鍛えている筋力を発揮し、1日ばかりで行なう作業を、1時間程度で完了させてしまったところは、「さすが、体育大生持ち前の筋力！」といったところか。

さまざまな気象条件の中



カッターを操る実習生



無人島で活動する実習生たち

でも、実習生たちは海という大自然の素晴らしさを満喫している様子だった。最終日には、海洋スポーツ競技大会が開催され、各班の実習期間中の成果を出し合っていた。また、本実習では実習生が主体となり、活動するよう班長、副班長が中心となり、試行錯誤しながらも、班のさまざまな活動に取り組み姿が多くみられた。通常の授業期間中には見ることでできない、学生たちの新たな一面を垣間見ることができ、とても良い雰囲気を実習が進んだ。海洋スポーツキャンプ実習で得たさまざまな気づきを大学に持ち帰り、より充実した学生生活にして欲しい。

【体育学部准教授 中山健】

平成29年度 A O入試・推薦入試結果

平成29年度も体育学部ではスポーツ特別 A O入試、A O入試、推薦入試 A・B が、教育学部では A O入試、推薦入試前期 E・F を10月から11月で実施した。

体育学部 A O入試(タイプ A・B・C)の志願者は231人と前年度の308人から25%の減少となった。特にスポーツ教育学科では42%の減少となった。要因としては全国大会出場とする「求める学生像」を明確に打ち出したことで、競技力の低い受験生が敬遠したと考えられる。推薦入試 A・B は志願者573人となり、こちらも前年度の678人から34%の大幅減となった。全国的にスポーツ科学系の新設が多く、特に同エリアの大手総合大学が新設したこと

で影響を受けたと推測される。

教育学部は A O入試の志願者は両コース合わせて79人となり、前年度比120%と増加している。特に保健体育教育コースの志願者は好調である。体育学部の減少の要因は他大学の影響としたが、保健体育の教員免許取得を主な進学目的とした受験生が教育学部に流れたとも考えられる。続く、推薦入試前期 E・F では147人となり、学部としては前年度から10%の減少にとどまっていたが、小学校教育コースで42%の大幅減、保健体育教育コースでは30%の増加と対照的な結果となった。推薦入試後期でも同様の傾向となり、教育学部の推薦入試では、小学校教育コースがかなりの苦

戦を強いられた。他大学も含め、教育学系統がこの2、3年、不人気傾向にある中、本学の小学校教育課程の認知度や、入試制度にも課題があると思われる。

一般入試が2月から行われるが、前半の A O、推薦入試の志願者減をどこまでカバーできるか、また次年度以降、今年度入試から見えるマーケットの状況や認知度向上に向けた広報活動の活発化、多様な受験生を受け入れる選抜方法など、国が進める高大接続システム改革をにらみながら、検討していかなければいけない時期であると考ええる。

【入試部】

コラム

ポーション 体育学部教授 滝瀬 定文

チヌ釣りで健康ライフ

筏の上でエサを包み込み、団子を海底に落とし込む。海底まで届けては巻き上げる。この動作を早朝5時から日没5時まで繰り返す。惰性でおろした団子が「パカッ」と割れ、穂先がスッと水平になった。何だかまた穂先が押さえ込まれ、反射的に竿を振り上げたら、激しい抵抗で現れたのが待望のチヌだった。ところが、納竿後には、ガラリーと疲れ果て体力消耗にあぜんとしてしまう。今回、疲れの本体を科学する目的で、酸素摂取量から消費カロリーを見積るチヌ釣りを分析することにした。消費するエネルギー出納関係は、熱量の単位であるカロリー (Kcal) で表した。それでは、釣行中の酸素摂取量から消費カロリーを見積ってみましょう。

実験条件は室温28度、湿度50%、風速1m/sの条件で、被験者は筆者です(図1)。

第1実験: 波止を想定。何も持たずブラブラとトレッドミル上を分速50m/sの速度で1時間歩く。

第2実験: 氷を入れたクーラー(12.3kg)、竿入れ(竿2本入り=0.5kg)、タモ(0.6kg)を担ぎ、1時間歩く。

第3実験: 筏を想定して、左手、右手(1秒/回)でハリスを15秒間手繰り寄せる。その後5秒間団子を握る要領でテニスボールを握る。そして30秒間穂先を見つめる。

第4実験: 落とし込み釣りを想定。タモを背中に担ぎ、落とし込みの格好で30秒間歩く。そして、立ち止まり30秒間落とし込む。これを1時間繰り返す。

これらの実験からエネルギー源として利用された炭水化物と脂肪の割合を求め、呼吸マスクを装着し、炭酸ガスの排出量を酸素の摂取量で割った呼吸商を求めた。酸素の摂取量から消費カロリー(kcal)と炭水化物や脂肪の燃焼量(g)が求められる(図2)。ブラブラと歩いたときのエネルギー消費量は、260kcalになった。内訳は、炭水化物136(Kcal)、燃焼量(32g)、脂肪124(Kcal)、燃焼量13.78gだった。次に、クーラーを担いだ時は、312.98kcalになった。炭水化物179.46(Kcal)、燃焼量(42.20g)、脂肪133.52(Kcal)、燃焼量(14.89g)となる。最初はニコニコペースで歩いていたが、30分過ぎから大粒の汗が噴き出していた。そして、ひっきりなしにクーラーを左右交互に担ぎ直した。あかつきのやみで釣り始めた私のエネルギーは消えて跡形もなくなった。



図1 釣りを想定した酸素消費の測定

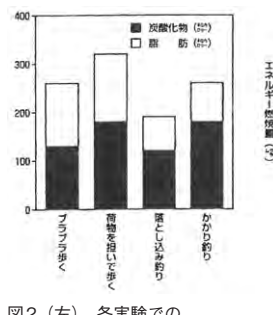


図2 (左) 各実験でのエネルギー消費量 (kcal)



◆◇今年も酉年。何度目か?の年男になった。酉年の由来が知りたくなった。こんな時SNSは便利だ。スマホで音声入力したら、「これで何か」というほど出てきた。動物たちが神様に新年のあいさつに向かった際、猿と犬が喧嘩、仲裁を取り持つために、猿と犬の間に入り、十二支の10番目に置かれた。これが酒つくりの季節なので酉になったそう。◆◇それから桃太郎に結びつく。桃太郎は、猿、雉、犬を引き連れて鬼退治に行く。干支の方位で一申、酉(戌)となり、鬼門と対峙する方向ということで、鬼退治の象徴になったと言われる。目からいうと、酉年思えば、ただ総務省の統計によると、酉年生まれは十二支の中で最も少ない94.3万人で、1108万人と最も多い丑年生まれより16.5万人も少ない。終戦の1945年の出生数が少なく、ベビーブームに当たっていないからの分析だ。◆◇記者時代「鳥の目、虫の目を持って」と指導された。俯瞰的に見る反面、はいずり回ってでもネタ探しをしろということだ。今号は、各賞受賞、リオ五輪・パリンピック特別講演、表彰の特集を組んだが、まさに「鳥の目、虫の目」だ。本学ならではの多土済々ぶりを分かたせてもえたら、編集者としては大空に羽ばたきたくなる。

【相馬卓司】

我が青春の記

健康福祉学部講師
安田友紀



体育学部准教授
曾根純也



させようとするな、わかろうとせよ

「生涯、運動会をしたい」と考えた高校3年生だった私は、大阪体育大学 体育学部「生涯スポーツ学科」に入学すること決めた。「生涯スポーツ学科」にこだわった理由は「年齢や性別、障がいの有無、その能力に関係なく、誰でも体を動かすことが楽しい」と感じる時間と空間を提供できる指導者になりたかったからである。

「大阪体育大学生涯スポーツ学科」では、人生におけるキーパーソンとの出会いの連続であった。「創作ダンス部」に入学した私は、障がい児とその家族で構成されているダンスグループ「Dance Assembly」ド・フェアリー」と出会い、4年間指導アシスタントを務めた。踊ることの意義や、価値をダンスグループのメンバーから教えてもらった。この出会いが大学院進学を決めた。「障

がいの有無に関係なく、誰もが潜在的に持つ力を発揮し、体を動かすことが楽しい」と感じる時空間を提供できる指導方法について研究したいと考えた。

大学・大学院で出会うことができた先生方、先輩、後輩、仲間とは、今もつながり、「ダンス」を通して広がっている。現在、「出会い・繋がり・広がる」をキーワードにインクルーシブ舞台の創造として「みんなできつくる発表会」を毎年開催している。地域・教育・医療の連携として、1歳から70歳を超える参加者らと、年齢や障がいの有無を越え、みんな作品を創っている。

その際、私が大切にしていることは「させようとするな、わかろうとせよ」というカウ



林先生(左)と2人(2005年)



子供たちと戯れている(2006年)

ンセリングマインドの言葉である。この言葉を教えてくださった恩師はじめ、出会うことができた全ての皆様のおかげで今の私がある。

貴重な時間

大学入学後、サッカー部の門をたたいた。受験勉強で鈍った体を戻す理由で、1年生は毎朝400回インターバルを10回、また12分間走を週1回する等の走り込みを3カ月間続けさせられた。しかしこの朝練が終わる直前、肉離れを起こした苦い思い出がある。以来、度重なるけがと、実力不足も相まって公式戦には手の届かない競技生活を送った。

競技者としてはもがき苦しんだ4年間だったが、それでも何がしかサッカー部に貢献しようと、練習のほかにはけがの原因となった1年生係りをおかして出て、朝早くから新入生と一緒に走り、その役を卒業するまで続けた。4年次には関東トーナメント・リーグ・総理大臣杯で3冠を達成する貴重な経験をさせていただき、仲間とのかけがえのない出会いや、喜びを共有でき

る幸福感を味わわせてもらった。

それとは別に、ゼミでお世話になる朝岡正雄先生の「運動学」で、学習位相論や、自己観察論等の講義を拝聴し、深い感銘を受けた。懸命に取り組んできた運動を学術的にとらえることに「これが大学の学問なんだ」と魅了させられた。論文指導で真っ赤になるほど添削していただいた原稿は、私の宝として現在も大切に保管している。

また、専門語学でドイツ語を選び、辞書を引く引きマイネル運動学や、ドイツ語の文献に体当たりしていたことが懐かしい。そうした朝岡研究室の影響があつて次の進路を大学院と決意。受験後、サッカー部の松本先生から「お前いつドイツ語の勉強



大学の練習場で同僚と(左が筆者)



筑波・中央の定期戦より(西が丘サッカー場)

したんだ」と合格を祝福してくださいました。は、努力が報われたような気がした。

その後、ドイツ留学や、Jリーグの下部組織に在籍してから、現職に就かせていただいている事を考えると、大学の4年間は、人生の貴重な時間だったと感じている。



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

●博士 前期課程 後期課程

【体育学部】

●スポーツ教育学科
●健康・スポーツマネジメント学科

【健康福祉学部】

●健康福祉学科

【教育学部】

●教育学科

企画広報室

大学事務局

庶務部、教学部、入試部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設

図書館、生涯スポーツ実践研究センター
健康福祉実践研究センター、情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

<https://www.ouhs.jp>